

# 田口昭子さん

【環境美化を考える会】

## 愛する町を 子どもたちへつなぐ

かつて炭鉱の町として栄えていた大島町。しかし、閉山とともに人も町も活気を失い、往年の面影も忘れ去られようとしていた。そんな姿に胸を痛め、立ち上がった女性がいた。大島町で美容室を営んでいた田口昭子さん、当時五十一歳。自身が抱えていた大病を克服後、「救われた命で町に恩返しをしたい」という気持ちで自然と湧き上がってきた。

そこで始めたのがゴミ拾い。毎朝仕事に行く前に、町のあちこちで空き缶などを一人で拾い集めた。ゴミがなくなると町がきれいになると同時に、自分の気持ちまで浄化されるような不思議な気持ちを感じたという。そんな田口さんの姿に感化された住人が、一人また一人と増え、今では百十五人もの頼もしい仲間ができた。活動内容も幅を広げ、大島大橋を基点とする県道沿いを中心とした花の植栽や除草作業をはじめ、美化活動だけでも年間二十回を超え、町内美

化に大きく貢献している。その取り組みが評価され、六月には「平成二十八年緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰」、七月にも国土交通省「平成二十七年年度づくり郷土賞」を受賞。「私の呼びかけで仲間に入ってもらったんじゃ意味がない。それじゃ他人事。主体的に参加してくれるメンバーが集まったからこそ、今があるんだと思います」と笑顔を見せる。

最近では、除草後の草木や生ゴミから作った堆肥を利用した農園「元氣やさい雅」の運営にも力を注いでいる。町内の子どもたちが農業体験をしたり、収穫した野菜を調理して食べたり。この農園が未来ある子どもたちの食育の場としても一役買っている。

「美化活動や畑仕事などで毎日が多忙。八十歳になり、体が思うように動かないなってきたけれど、仲間が助けてくれるから楽しくやれる」。そう話す田口さんの顔は、地元を愛するやさしさにあふれていた。



①美化活動で拾い集めた落ち葉や雑草で作った堆肥を混ぜ込んだ土 ②田口さんの愛情を受けた元氣な野菜たち。白ナスやピーマンなど季節ごとに育てている ③廃校になった小学校のグラウンドを利用した農園。近くにある井戸水を使って野菜を育てている

